
グロッチ・ストーリー～先駆者達の戦い～

ハムチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グロッチ・ストーリー〜先駆者達の戦い〜

【Nコード】

N1547L

【作者名】

ハムチー

【あらすじ】

あの冒険から十年の月日が流れた。
突然、魔法の世界に来るように言われたグロッチ達は魔法の国を見て絶望した。
魔法の国は以前のような美しい世界は広がっていなく、廃墟と化した町がいくつもあるということだった。

プロローグ（前書き）

この小説は『グロッチ・ストーリー』心の闇物語』の続編になっています。

まだ、前作を読んでいない方はそちらを読むことを強くお勧めします。

ちなみに、このプロローグを見ると、前作のネタバレがあります。観覧の際には十分に気をつけてください。

また、前作はブレイブ・ストーリーのストーリーをアレンジしたということで二次創作となっていました。今回はまったくのオリジナル作品（設定などはちよいちよいアレンジ）のため、二次創作の分類からはずしてあります。

もし、原作のイメージが壊れるようであれば見ないことをお勧めします。

また、二次創作という分類にした法がいいという場合、なにか問題があった場合は即座に直しますのでよろしく願います。

ブローグ

「グロッチ…。グロッチ…。」

コータローはしきりにグロッチの名を寝言で呼び、顔を歪ませていた。その様子をルーズリーは心配しながら見つめていた。

「グロッチ！」

いきなりコータローは飛び起き、そして叫んだ。

「コータロー、大丈夫？」

「ハアハアハア…。ルーズリー…。うん大丈夫…。」

コータロー達がいたのは周りが機械で囲まれたベッドの上だった。そして、周りにはルーズリーしかいなかった。

「怪我とか大丈夫？」

コータローの体には切り傷や擦り傷といった傷が多数存在していた。

「どうなった？あれから。」

「このキーフォスの町も襲われたの。」

「くそつ。俺の力が足りねえから、この町も…！マキエさんはどうした？」

「大丈夫。怪我をした人は出たけど、みんなこの城の地下室で身を隠しているわ。」

「そうか。よかった。」

少し沈黙が続く。

「ねえ、コータロー。もしかしてグロッチの夢見てた？」
不意にルーズリーが話しかけた。

「ああ、十年前のことを思い出していた。」

「そう…。グロッチ…。彼なら今の状況も解決してくれるかもしれない。」

「ルーズリー。夢みたいなお話、言っちゃダメだよ。一度来た人は、二度とここには来られないんだ。」

「分かっているけどさ…。どうしてもきてほしいのよ。」

「そうだよな。こんな危機的状況、類をみないよ。ニユーオングが崩壊なんて…。」

そう言っただけでコートローはため息をついた。

その頃、ノグチは…

「フウ…。もうわしらでは手を終えんな…。仕方ない、奴等と呼ぶしかないな。」

そう言っただけで口笛を吹いた。

すると、周りには森がざわざわと揺れ始め、何かが近づいてくる音がした。

そして、ノグチの前に巨大なリスが現れた。

「おおーチコリ速かったな。にしてもリスは成長が早い。もう親と同じ位じゃないか。」

それを聞いたチコリは顔を緩ませた。

「で、チコリ…。実は頼みたいことがあるんだ。グロッチ達がいる世界に行ってくれないか？」

しかし、チコリは首を横に行った。

チコリにも分かっていたのだ。自分が小さな通路を通る事ができないということ…。

「やはり、そうか。ワシはおぬしがもう少し小さいままだと思って呼んだんだが、おぬしの姿を見て驚いたわい。わかった。他のやつ

に頼もう。」

そう言っただけ振り返った。すると、チコリがノグチの肩を叩いた。

そして、ノグチは振り返る。すると、チコリの背中から小さなリスが出てきた。

「なっ！そいつはお前の子供か？」

チコリは頷く。

「チコリ…悪いんだが、そいつに頼めるか？」

すると、チコリは再度頷いた。

「そうか。よし、それじゃあ頼む。大丈夫か？」

すると、チコリの子供も頷いた。

「よし。それじゃあ頼む。でもお前はグロッチ達を知らないよな。

何か目印があれば…。」

その時、チコリは腕輪を取り出した。

「その腕輪…。グロッチのか？」

ノグチは手に取り、腕輪を確認した。

すると、腕輪には汚らしい文字がかかっていた。それこそがグロッチのだという証拠だった。

「これなら気づくはず。よし、頼んだ。つれてくるのは『グロッチ』『ブンブン』…いや、まて。どうせつれてくるなら、今までの旅人全員連れてきてくれ。」

「！？」

チコリは驚いた様子でノグチを見た。

「今は、かなり多くの戦力が必要だ。それにあいつを止めるのは、旅人しかおらん。」

話を聞いた息子は静かに頷いた。

そう言っただけ腕輪を背負ったチコリの子供は現世に繋がる通路を走って行った。

場所は変わり現世では…

「で、あるからして、このような結果になったわけです。」
大きな大ホールの前で誰かがプレゼンをしていた。

「以上で終わりにします。ご静聴、ありがとうございました。」
頭を下げると会場は拍手で包まれた。

今日は研究発表会が文化会館で行われており、様々な科学者が自分の研究したものを発表していた。

「ありがとうございます。では、続いて『森屋』さんによる『太陽系と地球環境による相互的接点』です。」

そのような放送が流れ、先程まで発表していた人は控え室に戻って行った。

「グロッチー。お疲れっ！」

急に呼ばれ、グロッチは振り向いた。

「あ、ブンブンっ！いやー緊張したよ。」

「でも、なかなかよかったわよ。…私も頑張らなきゃ。」
そう言っているとブンブンは足を叩いた。

あの魔法の国に旅立ってから十年の月日が流れていた。グロッチは無事学者になり、ブンブンもまた、学者になることができていた。

「ねえ、そうだ。あの呪文唱えてっ。」

「えっ？」

「ほら、あなたがいつも言っているおまじない。」

「ああ、あれか、いいよ。」

するとグロッチは人差し指でブンブンを指差した。それと同時にとある言葉を叫んだ

「ナントカ・ナラーナ」と…

プロローグ（後書き）

更新はものすごく遅くなると思います。

ご了承ください。

10年後の冒険者達（前書き）

前作（心の闇物語）のネタバレがありまくりです。

読む前に注意してください。

10年後の冒険者達

「フウ…。やっとプレゼンが終わった。」

研究室のベッドで横になり、グロッチはそつとため息をついた。

「えっと…。明日が講演会。明後日が合同研究会。その次が…。ユニバーサル発表会。うわっ。忙しすぎる。」

自分に言い聞かせ今後の予定を確認する。

その時、高らかな音とともに携帯が鳴り響いた。

「はい。もしもし?」

「おっ、グロッチ? いやー聞いてくれよ。明後日の試合、俺が先発で出ることになったんだ。」

「マジか!? ヤーマン。」

電話の相手はヤーマンだった。

十年経った今、ヤーマンはプロのサッカー選手になっている。

「見にこれる?」

「あーっ、悪いな。予定が入ってるわ。ゴメン。」

「そっか…。分かった。テレビでもなんでもいいから応援してくれ。」

お前の声は相当効果があるから。」

「おう。分かった。じゃ、頑張れよ。」

「ああ。」

それを最後に電話を切る。

「よかったなあ。ヤーマンもやりたい事ができて。」

しみみりと言葉を溢すと、瞳を閉じた。

そして、夢の中に入ってしまった。

太陽が昇り今日が始まった時、携帯が高らかな音を発しながら震え

ていた。その音でグロッチは目を覚まし、手探りで携帯を探しだし、ボタンを押した。

そして、もう一度寝ようとした。

「あつ、もしもし？グロッチ。私、ザリガニです。」

電話から女性の声が聞こえてきた。

アラームは着信音だったのだ。

「もしもし。グロッチ？起きてる？」

その声に反応し、グロッチは顔を上げた。

そして、携帯を手にとった。

「もしもひ？」

起きたばかりなので呂律が回らない。しかし、それでもザリガニは理解した。

「良かった。起きてた…って訳じゃなさそうだけど、出てくれて良かった。」

「なんかよう？」

目を擦りながら問いかける。

「それが聞いてっ。実は昨日、リスを見たの。」

「リス…？なに？その報告？迷惑なんっすけど…。切っていい？」

「ちよっ、待って。切らないで。ちよっと報告があるのっ。」

「なに？報告って。」

「それじゃあ聞くけど、十年前の試験覚えてる？あの水晶集めたやつ。あの試験でグロッチ犬と猫とリスいたでしょ？」

「犬、猫、リスって…。コータロー、ルーズリー、チコリのことだろっ？忘れるわけないじゃん。俺の人生のターニングポイントだもん。」

「そうよね。あなたが忘れるわけないか。まあいいや。落ち着いて

聞いてね。」

「な、何かあったの？」

グロッチは目を覚ました。十年前のことを聞かれてからのこの流れはそのことに関係することだと感づいたのだ。

「私、チコリ、見た。見たって言ったりス、チコリだった。」

「はあ？」

寝起きのせいかな、よく分からなかった。

「だから、私チコリ見たのよ。」

「いつ!？」

「今日の昼間。」

「は？」

外はまだ朝だ。

「ちょ、ザリガニ。どこで見たんだ。」

「ニューヨーク。」

「ニューヨークウ!!」

驚くべき発言が飛び出した。ザリガニはニューヨークにいていた。

「ちょっ、遠!!」

「何言つてんの。明後日来るんでしょ。学会の発表で。」

「あつ。」

「だから報告する為に連絡したの。」

「そうだったのか。でも、それ本当にチコリだったの?ふつうのリスじゃない？」

「私も最初は違うと思ったのよ。だけど、持っていたのよ。あなたのニューオングの腕輪持っていたのよ。」

「えっ!？」

「微かに見えたの。あなたの字が腕輪にあったのっ。」

「ま、マジかよ。」

信じられなかった。自分たちは向こうの世界に行けるが向こうの住人がこちらの世界にこれるのか疑問を抱いた。

「でも、なんで？」

「知らないわ。でも、なんか必至だった。私も追いかけたんだけど、チコリ素早いから……。」

「そうか。確かに速いからなって、そんなことじゃない。必至だったの？」

「うん。誰かを探しているみたいだった。」

「……もしかして、探しているのって、俺のことなんじゃ……。」

「私もそう思った。だから、一番最初にあなたに連絡したの。」

「そうだったのか。わかった。明後日、行って探す。」

「そうして。私もあなたの発表終わった後、探すから。」

「ああ。それじゃあ明後日。」

「ええ。まっているから。」

そう言って電話を切った。

目覚めているのだが、動こうとしなかった。頭の中には魔法の国のことが思い出されていた。10年も前のことなのに、鮮明に覚えていた。

「チコリ……ハッ！こんなことしている場合じゃない。いかなきゃ。」
講演会のことを思い出し、慌てて支度をはじめた。
そして、そそくさと家を出て行った。

いつもの道。いつもの電車。行先は違うけど、乗る電車は一緒だった。

た。その為、いつも通りの通勤ができると思った。しかし、今日は違う。

頭の中に、魔法の国が思い出されていた。

「『俺に会いに来た？会いたくなかったから？いや、それだったらもうとつくの昔にきているはずだ。やっぱり何かあったんだ。』」
いつも目を通すはずの資料にも目を通さなかった。

そして、いつの間にか目的の駅まで付いていた。

「フウ…とりあえず、切り替えよう。今は講演会のほうが大事だ。」
気持ちを切り替え、グロッチは講演場所に歩きだした。

しかし、講演会の内容は学者になるまでの経緯等を話すことだった。その為、必然的に思い出す羽目になった。
さまざまな思いが生じる中で講演会をやっていたが、終わった時に達成感はなかった。

舞台を後にし、控室に戻ったグロッチはため息をつきながら椅子に座った。

そのそばでは、主催者の人がお礼的なことを言っていたが、グロッチの耳には入っていないかった。

「フフフツ。グダグダだったな。グロッチ君。」

嫌味ったらしい笑い声とともに誰かがグロッチの側に近寄ってきた。

「ん？なんだ。ナオか…。なんかよう？」

「んー？今日の講演会の評価してやろうと思ってな。」

「へえー。勝手にしてる。」

「ハハッ。お前の講演会20点だ。なんだよあれ。意味わかんねえ

し。魔法の国とか。あるわけねえじゃん。」

「…じゃま。だから消えて。」

「なに嫉妬してんだよ。まっ、お前が俺に勝つなんてまずないからな。お前は何もできないもんない。そんな、お前が日本一の学者の俺に勝てるわけない。」

「お前が、トップだったらこの世界は終わるな。俺はもつとすげえやつを知ってたんだよ。あいつこそ、日本…、いや、世界一だよ。」

「俺より上がいるはずないだろー。そんな奴いたら見てみたいわ。」

「いずれ見ることになるさ。世界中のどこにいても…。」

「へっ。その時が楽しみだぜ。ま、それより、同じ学者として明後日の発表会は今日みたいな発表すんなよ。俺が恥かくから。」

「お前があそこに立つことが恥だわ…。まあ、いいよ。その時、俺の実力見せてやるから。」

「期待しないで待ってるわ。」

そう言っただけは控室を後にした。

「…自己中が、わーわー喚きやがって。」

グロッチはため息をついた。

ナオ。通称自身過剰のナオ。みてわかるとおりウザいやつ。他の学者にも嫌われており、あまりかかわりたくないと思っている。そんな奴にグロッチは話しかけてしまった為に、付きまとわれるようになった。学者になれたのは父親のコネ。自分では何にも努力をせず、彼の実績は殆ど父親のもの。

まあ、ぶっちゃけるとクズだ。

その後、グロッチも主催者達に挨拶をし会場を後にした。そして、明日と明後日の発表会の資料をまとめるため家に向かっていった。

その途中もチコリのことか頭から離れなかった。

10年後の冒険者達（後書き）

ハムチー「いやー、始めました。」

ネギシ「期待MAXだぜ。」ハムチー「……………そう。」

ネギシ「テンションひくつ。」

ハムチー「いや、だってさ。もともとグロッチ・ストーリーは前回で終わりのはずだったわけ。それなのに。」

ネギシ「俺が続きを書くように言ったんだ。GJだろ。」

ハムチー「グッジョブじねえよ。俺の負担考えろ。」

ネギシ「知りませんっ。」

ハムチー「こいつ。」

ネギシ「ま、始めちゃったんだし、最後までやるよな。」

ハムチー「まあ、やるけども、更新はかなり遅いよ。今回だってプロローグからずいぶん経ってるし。」

ネギシ「マジか。でも、俺は待つぜ。」

ハムチー「そう…。」

ネギシ「そして、このあとがきコーナーも復活だろ？」

ハムチー「まあね。このコーナーが書いてて一番楽しいところだからね。」

ネギシ「と、いうことだそうだ。よろしくな。読者の諸君。」

ハムチー「勝手に締めるな。まあ、いいか。では、また次回で。」

ネギシ「ところで、俺、出るよね？」

ハムチー「出るよ。」

ネギシ「クルミさんは？」

ハムチー「出すよ。」

ネギシ「っしやあああああつ。」

ハムチー「……………」。

遭遇（前書き）

いやはや、遅くなってしまい申し訳ない。

遭遇

「でわ皆さん。お疲れ様でした。」

ようやく合同研究会が終わりグロッチは挨拶を済ませて帰ろうとしていた。

「あー。グロッチさん。どうです？これから一杯？」

「あつ、すいません。明日は、あれなんです。」

「あつ、そうでしたね。誘ったりしてしまつて申し訳ない。」

「いえいえ。発表が終わつた後にも誘つてください。」

「そうですね。でわ、失礼いたします。」

「お気をつけて。…お疲れ様でした。」

一礼をしてメンバー全員を見送るとグロッチは携帯を取りだし電話をかけた。

「あ、ザリガニ？どう？チコリ見つかった？」

「全然。手がかりなしよ。」

「そうか。ところで明日、空港まで…「わかつてる。」それじゃあ頼むよ。あつ、ヤーマンとかには話したのチコリの事？」

「ええ、一応。ブンブンは今日来るからそこで伝えるとして、ヤーマンもなんとか通じたけど、試合があるみたいで、そっちに集中させようと思って…。」

「そうか、で、クボッチは…やっぱりダメか。」

「うん。」

「まあ、しょうがないね。よし、それじゃあ明日、頼むよ。」

「うん。待っているから。」

そこで会話は終了。するとグロッチは違う人に電話を掛け始めた。

「もしもし。グボッチさんで…「ただいま電話にできることができません…」やっぱりか。」

そう呟き電話を切ろうとしたがせっかくかけたので留守番電話にメッセージを残す事にした。その後、グロッチは明日の準備の為、急いで自宅に戻った。

「よし、行くか。」

グロッチは大きな荷物を手に持ち、空港にいた。チケットは取ってあるので荷物を預けているいろいろやって飛行機に乗るだけだった。

「チコリか。」

まだ、頭の中から魔法の国の事が離れない。

本来は発表が目的なのだが、目的が変わっている事は自分でもわかっていた。

飛行機の中では発表する資料に目を通していた。

そもそも、今回の発表会は学者の中でも特に有名な人達の前で発表し、評価を受けるもので、学者を目指す人達にとっての最初試練である。そして、その評価によって順位わけされ、研究費や施設といったことが絡んでくるのだ。そんな中で発表をするにも関わらず、グロッチの頭の中に資料の内容は入って来なかった。

発表会が行われるニューヨークに着くとザリガニが迎えに来ていた。

「さあ、グロッチ。乗って。」

「おう。ありがとうザリガニ。」

軽く返事をして車に乗り込むグロッチ。そんなグロッチに話かけながら車を動かし始めた。

「久しぶりね。」

「ああ、そうだな。」

「どうなの？発表の方は。」

「まあまあかな。でも、やれる事はすべてやった。」

「そっか。」

「そう言えばブンブンは？」

「先に会場にいつてるわ。準備を手伝っているみたい。」

「そっか。」

会話を進めながら快調に車を走らせているザリガニ。その横でグロツチは周りの景色を眺めて初めてのニューヨークに興味を示していた。

「そういえば、チコリをどこで見たの？」

「私の働いている所の近くの公園。」

「そっか。でも、なんでよりによってニューヨークにチコリは来たんだ。」

「本当よね。まるで私たちがニューヨークに集まることをわかっていたみたい。」

「みんなっていつても、クボツチは来れないよ。」

「クボツチか……。もうすぐなんでしょ？あれ。」

「ああ。俺が最後に行った時は50パーセント完成してた。」

「そっか。クボツチ。頑張ったわね。」

「ああ。そうだな。」

そんな和やかな会話をしつつ、会場に向かって行った。

「あつ、グロツチ、ザリガニ。こっち。」

「ブンブン。」

会場に着くと入口の側でブンブンが待っていてくれた。

「グロツチ。大丈夫？発表。」

「ああ。やれる事はやった。資料もバッチリ揃ってる。」

「そう。よかった。あなたの事だからなにかしらやらかすと思ったけど。」

「なんだよ。それ。」

「ジョーダンよ。」

「いや、グロッチならやりかねない。」

「ザリガニまで。」

自然と笑顔が溢れる。グロッチの緊張を無くす為に冗談を言ったりしていたが、それが必要ないくらいグロッチは落ち着いていた。

「えっと、まだ発表まで3時間はあるわね。」

「うん。だけど私もグロッチもやらないといけない事があって。」

「そう。それじゃあ、私は時間潰しにチコリを探してくるわ。」

「！？チコリを。」

「そう。この周りにはよく知ってるし、迷う事もないしね。」

「そうか。頼むよ。」

「うん。でも見つけるには相当大変だよ。」

「大丈夫。それじゃあ、頑張つて。」

「そっちなね。」

そう別れを告げるとザリガニは車に乗ってニューヨークの街に消えていった。

「よし。こつちも準備しようか。」

「そうね。」

二人が会場に入ろうとすると一台の車が入口付近に近付き、二人の前で止まった。

「ありがとう。パパ。やあ、グロッチ君気分はどうだい。」

その車の中からはナオが姿を現した。

「今の瞬間に悪くなったよ。」

「ふっ、まあいいさ。それより、どうなんだ？発表は？」

「まあまあだな。まつ、お前よりはよくできてるよ。」

「なんだと？ふっ、面白い。なんだったら勝負するかい？どっちが
いい評価を獲るか。まつ、結果は分かっているけどな。」

「俺が勝つ結果か？」

「ちげえよ。俺が勝つ結果だ。」

「まつ、こればかりはやらないと分らないしな。」

「ああ。そうだな。じゃ、俺は先に準備してるぜ。あばよ。」

「ああ、三時間後にな。」

すると、ナオは建物の中に入って行った。

「ねえ、今のだれ？」

「ああ、知らなくていいよ。生きているうちに聞く事はない…と思
う。」

「そ、そう。」

「いちよう教えとくよ。俺と同期の学者で見習い。」

「なんか、嫌味言ってたね。」

「うん。いつものことだから、気にしたら負けだよ。」

「そ、そう。」

あまり興味を示してないのでナオの話を終わりにするグロッチ。そ
の後、二人も建物内に入って行った。

「んーやつぱり手がかりなしはダメか。」

街中を車で走りながら探しているがいつこっに見つからない。する
とその時、ザリガニの前をポリスがサイレンを鳴らしながら横切っ
ていった。

「！？またか。アメリカは治安がよくないわね。」

「そのリスを捕まえてください。」

「リス？まさかっ。」

慌てて交差点を曲がりパトカーの後を追う。すると歩道の客から悲

鳴が聞こえて来た。その足下を見るとリスの尻尾のようなものが見えた。

「見つけた。」

目標物を発見したザリガニはすぐ近くにあつた路地に入り法定速度を破りながら運転し、とある交差点の真ん中で止まった。

「さっきの道は一本の道に突き当たる。私の勘が正しければ、ここに来るはず。」

「おい。どうしたんだよ。」

後ろの運転手がクラクションを鳴らしながら怒鳴っている。しかし、それをシカトして待ち続けた。

すると、リスの姿が見えた。

「来たっ。」

その瞬間、ザリガニは車のドアを開けて向かってくるリスに紙クズを投げた。

すると、リスは見事なジャンプをしかわしたと思うと、そのままザリガニの車に飛び乗って来た。

「確保っ。」

そして、ドアを閉めた。その後、急いで交差点から出た。

車の中ではリスが走り回っていた。

「ねっ、あなたチコリでしょ？あなたは人を探している。ズバリ、グロッチという青年でしょ？その人の所に連れて行く。」

「！？」

ザリガニの言葉がわかったのか、リスは静かに座り込んだ。

「その車、直ちに止まりなさい。」

「げっ。厄介なのが来た。」

そう言いつつも車を止める。すると、ポリスも止まり、ザリガニの側に来てドアを叩く。その為、リスが逃げないように瞬時に外にでた。

「な、なんですか？」

「いやー。よくやった。よくリスを捕まえてくれた。感謝するよ。」

「は、はあ。」

「では、早速捕獲したリスを渡して貰いたいのだが。」

「！？あ、あの、すみません。このリス、私が貰う予定だったリスなんです。どうやら引き取りにいく前に逃げ出してしまったようで…それで捕まえたのです。迷惑かけてすみませんでした。」

「そうだったのか。まあ、仕方がない。本来は何かしらの罰を与えるものだが、それといって被害も報告されてないし、問題も自分で解決したんだ。見逃してやろう。」

「本当ですか。ありがとうございます。」

「まあ、以後気をつけるように。」

「はい。」

その後、ポリスは去っていった。

「ふう…。まったく、迷惑かけないですよ。」

後ろにいるリスを確認しながら呟く。

「ってか。本当にチコリ？」

疑問が生まれた。しかし、腹にはちゃんと見覚えがある腕輪がつけられていた。

「ちよつと見せて。」

そう言ってリスを掴むと腕輪の内側を覗き込んだ。

「あつ、字が書かれてる。しかも、グロッチの字に近い。」
確信が持てた。そして、問いかける。

「あなた、チコリよね。」

掴んだ状態で尋ねる。するとリスは首を横に降った。

「えっ。違うの!？」

驚きを隠せない。条件的に照らし合わせればチコリのはずだったが、ザリガニは時の流れを忘れていた。

「えっ。違うの？」

気づかないままリスを物色する。そして、ある事に気づいた。

「あれ？君、女の子だっけ？」

グロッチから聞いた話だとチコリは雄だ。しかし、雄にないものがある。そして、とうとう気づいた。

「あつ、そうか。あれから十年経っているんだっけ。ということは、チコリの子供？」

その言葉に反応しリスは頷いた。

「そっかー。チコリ子供生んだのかー。」

微笑みながらチコリの幼少期を思い出す。そして、そつと助手席に座らせた。

「さあ、今からグロッチの所に向かうからね。」

そして、車を再度動かし始めた。

「ふう。あと三十分か。」

時計を見ながらグロッチが呟く。資料の確認もパソコンのファイルも確認してやってやる事がなかった。

「魔法の国か。」

暇になると同時に頭に浮かんでくる。もう、忘れることはできない。

「暇な時間も『ナントカ・ナラーナ』」

ドアに向かって呟いてみる。すると、突然ドアが開いた。

「！！」

「大変よ。グロッチ。」

姿を見せたのはブンブンだった。息を切らしている。

「どうしたの？」

「ザリガニが帰って来たんだけど、ここに着いたと同時に見つけて来た。チコリの子供が建物の中に入っちゃったんだって。」

「えっ。なんだって？チコリの子供？この建物？」

「そう。ザリガニが入口付近にいるから話を聞いてみて。」

「わかった。行ってくる。」

「それじゃあ、私はチコリの子供を探すわ。」

「おう。頼んだ。」

入口へと向かうグロッチ。なぜかワクワクしていた。自然に顔も笑みが溢れる。そして、入口付近でザリガニの姿を見つけた。

「おう。ザリガニ。どうしたんだ？」

「見つけたのよ。あなたの腕輪を持ったチコリの子供を。だけど、ここに着いたら真っ先に建物内に入っちゃって。」

「なるほど、状況は理解できた。俺も探す。」

「待って、あなたには発表が優先よ。」

「大丈夫。まだ時間はある。ギリギリまで俺も探すよ。」

「そ、そう。わかった。お願いね。特に関係者以外立ち入り禁止の場所を探してくれるとありがたい。私、入れないから。」

「わかった。」

そして、二人は二手に別れて探し始めた。

建物内では叫び声がいくつも聞こえる。その場所にチコリはいるのだろうが、どこだか場所を特定できない。耳と情報を頼りに探して

いるが見つからない。そんな中、放送が流れた。

『あと、10分で発表会を始めます。発表される皆さんは準備を始めてください。』

「くそつ。間に合わなかったか。」

グロッチは壁を叩くと自分の待機部屋に向かい。発表の道具を持ってホールに向かった。

「おや。グロッチ君。遅いじゃないですか。」

「わりい。いろいろあつて。」

「そう言えば騒がしかったね。」

「まあ、気にしなくていいよ。」

「そう。」

ナオが口を閉じる。彼なりに集中し始めたらしい。それを見てグロッチも集中し始めた。すると、足が攢りたい。何かと思って下を見るとそこにはリスがいた。

「えつ。チコリ…?」

一瞬時が止まる。衝撃的な事が目の前で起こっていた。

リスはグロッチをじーっと見つめている。そんなリスにどう接しているのか分らない。

そんな時、ブンブンが叫びながら近づいてきた。

「グロッチ。捕まえて、その子がチコリの子供なの。」

「ま、マジかよ。」

気づいてはいたが、実際に言われると焦る。もちろん、グロッチだけでなく他の学者も驚いている。ナオも例外でわない。

「おい。グロッチ。なんだよ。このリス。お前のか?」

「俺のではないけど、俺にとって大切な存在だ。」
そう言いつつ、そつとリスを捕まえて待機していた場所から少し離れた。

「おい。グロッチ。待てよ。」
なぜかナオもついてきた。

遭遇（後書き）

ネギシ「ハムチー！！」

ハムチー「なんだよ…」

ネギシ「更新遅すぎじゃ、ボケ。」

ハムチー「前回言っただろつ。更新はかなり遅くなるつて。」

ネギシ「言っただけだよ。1ヶ月、2ヶ月くらいかと思ってたんだよ。それがなんだ。最終更新日いつだ？」

ハムチー「6月9日（笑）」

ネギシ「3ヶ月じゃねえか？」

ネギシのストレートパンチ炸裂

ハムチー「しょうがねえだろ。忙しいんだよ。」

ネギシ「はあ、やれし。」

ハムチー「無理ー。」

ネギシ「一回くたばれ。」再度パンチが直撃

ハムチー「まあ、確かに3ヶ月はいきすぎたと思ってる。」

ネギシ「そうだろ？」

ハムチー「だから、次回からは最低2ヶ月で頑張りたいと思います。」

ネギシ「それでもおせえ。」

ハムチー「こればかりは、しょうがない。じゃ、そういうことで…」

ネギシ「勝手に終わらすな。」

思い出の場所へ（前書き）

お久しぶりです。

ずいぶん月日が経ちましたね。
すいません

思い出の場所へ

「チコリ…。チコリなのか！」

グロツチはリスに尋ねた。しかし、リスは首を横にふった。

「ああ、そっか。チコリじゃ、ないのか。」

ため息をつきながら言葉を言った。その表情は複雑だった。

「ねえ、グロツチ！腕輪に手紙がついてる。」

「えっ！」

ブンブンの思いがけない言葉に驚きながら振り向いた。

そして、手紙を読み始めた。

達筆な字で書かれていて読むのは難航したが、ギリギリで読める範囲であった。

「グロツチ。君がこの手紙を読んでいるということは、無事に届いたのだらう。こうしてチコリの子供に手紙を運んでもらったのは理由があるんだ。実は魔法の国が大変なことになってしまったのだ。君の力を貸してくれ。できれば他の4人も呼んで欲しい。とにかく強い戦力が必要なんじゃ。今すぐ来てくれ。ナイスゼウス、ノグチ…か。」

手紙を一通り読み終えたグロツチはそつと手紙を置いた。

「魔法の国が大変？」

グロツチの言葉を聞いていたブンブンが尋ねた。

「そうみたい…。」

手紙を見つめながら呟くグロツチ。

「おいつ、ちょっと待てよ。意味が分からねえよ。なんだよ。魔法の国って。」

ナオが慌てながら問いかけた。しかし、2人はシカトした。

「答えるよ。」

2人は黙ったままだった。

それぞれの頭の中には10年前の事でいっぱいだった。それと同時に不安が募っていた。

「あと5分で発表会を始めます。準備をしてください。」

いきなりスピーカーから音声案内が出て廊下に響き渡った。

「おいっ。グロッチ。時間だぜ。手紙の内容が本当であれ嘘であれ、今、俺達がやることは発表だ。準備しようぜ。」

すると、グロッチは立ち上がった。

「ゴメン。ナオ。勝負はまた今度だ。」

「えっ？」

ナオが啞然とする一方、ブンブンは心配そうにグロッチを見つめていた。

「グロッチ。でも、これから発表会よ。あなたが今まで頑張ってきたこと発表する大事なものよ？行っちゃっていいの？」

ブンブンの問いにグロッチは黙ったままだった。

「私、先に行くから後から来ても大丈夫だと思うんだけど……。」

再度質問してみる。すると、グロッチは口を開いた。

「いや、俺も行くよ。だって心配だし。それに、俺が見捨てると思っ
うか？」

笑顔を見せてグロッチはブンブンを見た。その答えを分かっていたように、ブンブンは微笑んで「そうね。」と呟いた。

「ちょっと待て。話を勝手に進めるなっ。なんだよ魔法って。発表より大事なもんなのか？」

ナオが問いかける。すると、2人は頷いた。

「まじかよ…。わ、わかったよ。行つてこいよ。発表は俺が一番になる。だから、行けよ。」

ナオが怒鳴り散らした。すると、その様子を見たグロッチはあることに感づいた。

「ナオ…。」

「な、なんだよ…。」

「一緒に行く?」

「ハア!？」

「行きたいんでしょ?魔法の国。使つてみたいんでしょ?魔法。」

「な、そ、そんなわけ、あるかい?」

「あ、そう。それじゃあ、俺ら行つて来るから、発表頑張れよ。」
そう言つてグロッチはナオに背を向けた。

「ちよつと待てよ。」

すかさずグロッチの服を掴むナオ。そのナオを笑いながらグロッチは見た。

「どうしても、きてほしいなら行つてやる。」

「ふつ。そう。だけど、危険だよ。今回は命も危ないかもね。」

「だ、大丈夫だつ。つか、俺をなめるな。俺はお前より頭がいいんだぞ。お前に負けるわけがねえ。」

「へー?。大した自信なこと。それじゃあ勝負するか?どっちが生き残れるか。」

「の、挑むところだ。」

グロッチの挑戦を受けたナオは2人の前に出た。

「さあ、さつさと行こうぜ。」

「ちよつと待ちなさい。行く方法調べるから。」

ブンブンが怒鳴り、ナオの動きを封じた。

「なあ、チコリ…じゃなかった。チコリの息子。どうやって俺らは魔法の国に行けばいいんだ？」

すると、リスは腕輪を指差し、嵌めるようにジェスチャーで伝えた。

「腕輪？とりあえず、嵌めるか。」

当時を思い出し、腕にぴったりの腕輪を嵌めた。

「で、これからどうするの？」

3人がリスを見る。

すると、リスは呪文を言うようにジェスチャーで伝えた。

「なんか、言えって言ってるみたい。」

「テレポートの呪文じゃない？」

「えっ！テレポートできんの！」

「ナオ、ちよつと黙ってて。」

「……！」

ナオは啞然とした。今までこんな真剣なグロッチを見た事がなかった。

「あれよ。きつと、私達が行く時にノグチさんが言ったやつ。」

「あれか。でも、覚えてねえ。」

「確か、ラムダとかベータとかの符合とかの組み合わせだったんだけど。」

「ナオ。何かしら符合言って。」

「えっ？俺、キログラムくらいしか知らない。」

「お前、それでも学者かよっ。」

「でも、キログラムは入ってた。前に何かつく。」

「ああ、そうだったな。」

「えっ、俺すごくね？」

「……………」

「とりあえず、思いだそう。確かシータもあつたのよ。」

「シータ？似たようなものもなかった？」

「ベータ？」

「違う。だけど、それに似てる。」

「アータ。イータ。ウータ……」

「……」

グロッチが何かに気づいた。

「イータだ。」

「えっ、イータ？」

「そう。だから、呪文は『イータ・シータ・キログラム』だ。」

グロッチが叫んだ。その瞬間、3人と一匹は会場から姿を消した。

思い出の場所へ（後書き）

> i 1 8 6 3 8 — 2 0 1 8 <

ハムチー「どうもー。といいつつ今日は私しかいません。ネギシは就活してます。」

ハムチー「えっ？ハムチーはやんないのかって？やってるよ。教員採用の勉強。うん。俺、教師目指すの。」

何かが走ってくる

ネギシ「テンションがひくーい。」

ハムチー「ね、ネギシ！お前、就活は？」

ネギシ「今日は休みだ。つてかなんだ。前回、投稿してから何日経ったんだよ！」

ハムチー「5ヶ月だ。」

ネギシ「威張るなー。どれだけ待ち望んだと思ってんだ。読者、前回の内容忘れてるぞ。」

ハムチー「大丈夫。俺も覚えてない。」

ネギシ「ぬぁにー！！」

ハムチー「いや。ほら、忙しかったんだよ。」

ネギシ「そうだろうけど、前作のお前はそれでも2ヶ月以内には作

ってくれたはずだ。それなのに……。かわっちまったな。」

ハムチー「うん。そうだね。」

ネギシ「テンション低いよ！」

ハムチー「寒いんだよ。この文書してるリアルな俺が寒いんだよ。」

ネギシ「あつためれ！」

ハムチー「まあ、そういう訳だから、このへんで。」

ネギシ「うおーい。勝手に終わらせんなー!!」

変わり果てた始まりの場所（前書き）

なんやかんやで投稿してしまった。

変わり果てた始まりの場所

『鷲と白鳥を仲間にする星座の扉へいけ。さすれば新たな道が開けるであろう』

10年前同様に頭の中に問題が入り込んできた。

それに気づいた3人は一斉に目を開けた。

目の前には大きな地球の模型が輝いていた。

「えっ。なんで一緒なの!!」

「そんな事より答えよ。早く見つけないと。」

「えっ、なにになになに?」

ナオがテンパる。しかし、2人と1匹は走り出した。

「グロッチわかってるわよね? 答え。」

「ああ、天文学者なめんじゃねえ。」

「えっ、何すればいいの?」

「見つけるんだ魔法の国の入口を。」

「さっき聞こえた問題の答えが入口なんだ。」

「えっ、その答えは？」

「いて座！！」

2人が一斉に叫んだ。

「なにやるか分かったら早く探してっ。」

ブンブンが指示を出した。それによりナオも行動を始めた。

そして、数秒後グロッチが見つけた。

「みんな。あつた。早く！」

グロッチがみんなを呼ぶ。その呼び声につられて2人と一匹が駆け寄ってきた。

「よし。行くぞ。」

グロッチの掛け声のもと、3人と一匹はドアに向かってジャンプし、ドアを開けて中に入ってた。いった。

『ドスッ』

「いてええっ！！」

何かがおかしい。

正解なら痛いはずがない。ということは…。

「何、ここ？」

「こんなだったっけ？」

「いや、違う。確か自然豊かな場所だったはず。着地も痛くなかったし。」

「おいおい。前と違うってことは、間違えたんじゃないの？」

ナオが不安気に尋ねた。

「ま、まさか。」

「そうよ。鷺、白鳥が仲間って…夏の大三角でしょ？それが仲間つて、残っていること座しかないじゃない。」

「そ、そうだな。」

答えを聞いたナオは納得したらしく苦笑いを浮かべていた。

「でも、本当にここはどこ？」

グロッチが呟いた。

その時、グロッチの肩にいたリスが高い鳴き声で鳴き、指をさした。

その為、グロッチが振り向くとそこには巨大なリスの姿があった。

「うわっ！なんだよこれえ。」

ナオが腰を抜かして座り込んだ。

そのリスを見た2人はじつと巨大リスを見つめていた。そして、巨大リスもこちらを見つめていた。

「なあ、こいつ。俺らを襲いにきたんじゃねえか？」

ナオが問いかける。すると近くにいたブンブンが静かに「違う。」と言った。

そんな会話を2人がしている間、グロッチは足を前に出し、巨大リスの方に近寄った。

「お、おいつ。グロッチ。辞めとけ。死んじゃうよ。」

ナオが忠告し、グロッチを掴みにいこうとした。しかし、ブンブンが腕を掴みナオの動きを止めた。そして、

「静かにしなさい。」

と真顔で呟いた。

その顔と言葉にナオは動けなくなった。

そうしている間にグロッチは巨大リスの前までたどり着いた。

目の前にいる巨大リスの体を隅々まで見える範囲で目でおった。

そして、一通り見たグロッチは巨大リスの顔を見た。

「チコリ…?」

小さく、でもしっかりと脳裏にある名前を呟いた。

すると、巨大リスは頷いた。

「チコリイ！！」

グロッチはチコリに抱きついた。

チコリもまたグロッチに抱きついた。

「知り合い！？」

ナオは驚きながらグロッチに問いかけた。しかし、久しぶりの再会を楽しんでいるグロッチにナオの言葉は届かなかった。

「いやー。チコリか。大きくなったから最初分からなかったよ。それに息子まで作っちゃって。」

満面の笑みで再会を喜ぶ2人。その様子を静かにナオは見ていたが、ブンブンは真剣な表情でグロッチ達に近寄って行った。

「ちょっといいかしら。ねえ。この国はどうなったの？」

ブンブンの言葉を聞き、グロッチは思い出した。

「あつ、そうだった。なあ、チコリ。何があつたんだ？」

すると、チコリは俯きながらついて来るように指示を出した。

その為、3人は着いて行った。

チコリに連れられ連れて来られた場所は草木で作った壁に囲まれた

部屋のようになっていた。

そして、その場所に誰かが横になっていた。

『カランカラン。』

チコリは壁に着いていたベルを叩き、部屋にベルの高い音が響いた。

「だ、誰じゃい。」

その人はゆっくり返事をし、ゆっくりグロッチ達の方を向いた。

そして、目が合った。

「あっ！」

「おっ！」

互いに顔を見て驚いた。

「の、ノグチさんっ！！」

「グロッチ。ブンブン。あとは…誰？」

2人はノグチの所に駆け寄った。

「ノグチさん。大丈夫ですか？さっきからあまり動いてないですが。」

「

「ああ、ちょっとな。ぎっくり腰になってしまったのぉ。そんなことよりよく来てくれた。」

「で、なにがあったんですか？」

グロッチは真剣な顔で問いかけた。

すると、ノグチはため息をついたあと話し出した。

「お前さん達がここを離れてから10年が経った。時代は変わり、魔法も変わってしまった。代わりにコンピューターが支配をするようになった。そんな中、大変な事が起こってしまったんだ。グロッチ。君が世話になったニューオングが解散してしまったんだ。」

「ニューオングが解散!!?」

2人同時に叫んだ。それほど驚くべき事だった。
ナオは相変わらず訳がわからなかった。

「そう。それにワイケーよりもケーワイよりも強い敵が現れた。奴は破壊は好まんが一度暴れだすと手がつけられん。しかも、そいつは紫水晶に封印していた魔物を体に取り込んだ。そして、極めつけはそいつが地球からきた旅人だということだ。」

「地球からの旅人...?」

「ワイケーよりケーワイより強い...?」

「でも、破壊は好まないんだ。」

「だが、奴は破壊はしないが別の物を破壊していく。奴は他の人に心の闇を作ってしまうんじゃない。」

「心の闇!!」

「な、なんだよ。心の闇って?」

しかし、3人はシカト。

そして、ノグチは話を続けた。

「ニューオングが解散したのも奴のせいだ。滅びた町もある。だから、君たちに助けて貰おうとよんだのじゃ。」

「俺らだけで勝てると…。」

「いや。思っていない。だから、お前達だけではない。今までこの世界に訪れた旅人全員を呼んだ。」

「えっ。全員!!」

「そう。多い方がいいと思ってな。」

「すごい。ところでその中に『Eランク』は…?」

「お前さん一人じゃよ。」

「マジでーっ!!」

「ランクってなによ?」

ナオが問いかける。それによりノグチは気づいた。

「お主は誰じゃ?」

「ああ、なんか来たそうだったので連れて来ました。一樣学者です。」

「ほおー。そうか。さっきの様子からして何も知らんようじゃな。仕方がない。ワシが教えてやろう。グロッチ。ブンブン。先に行っ

てくれ。」

「えっ！？この格好で？」

「違う違う。10年前と一緒に魔方阵の上に立てば服装が変わる。今回は2人とも『Aランク』じゃ。その後、右側の魔方阵に乗ればワープできる。そこから行ってくれ。それでは頑張ってくれ。」
そう言つて2人を見送つた。

その為、2人は魔方阵に乗り、衣装を身に付けた。

「あれ、前と衣装違うな。それにブンブン。お前、魔法使い？」

黒い衣装で包まれたブンブンは魔法使いそのものだった。

「そうみたいね。どっちでもいいけど。グロッチは剣装備なんだね。」

「ああ、俺魔法一つしか使えないからな。」

「でも、『Aランク』ならどんな魔法も使えるんじゃない？」

「そうかつ。よっしゃー。頑張るぜ。」

宣言をしたグロッチは足を進めた。それに連れられブンブンも魔方阵へ足を進めた。

そして、魔方阵に乗った時、ノグチが家の中から『イータ・シータ・キログラム』と叫んだ。

すると、2人の体はこの場から消えてどこかにワープしていった。

その様子を見たナオは驚いた。しかし、ノグチからこの世界のことを教えて貰った後は多少のことで驚かなくなった。

「よし、以上で大体わかったな。」

「あ、なんとなく。」

「よし、それじゃあ、君にこの水晶を預けよう。」

そういつてノグチは『青』の水晶を取り出した。

「これを、あと4つ集めれば願いがかなうですね。」

「ああ、そうじゃ。くれぐれも、盗まれるなよ。」

「あーわかりましたって。それより早く。」

「わかったわい。それじゃあ早く、魔方陣に乗れ。」

そして、グロッチ達が出発して10分位遅れたが、でナオも衣装を変え、魔方陣でワープしていった。

それを見送ったノグチは

「頑張ってくれ。学者の鏡達。」と呟いた。

変わり果てた始まりの場所（後書き）

ネギシ「今回早いな。」

ハムチー「ちよつとテスト用に投稿してすぐ消そうと思ったんだが、面倒になってこのままにした。」

ネギシ「動機が不純だが、まあいいや。すぐに読みたかったし。」

ハムチー「それじゃあこの辺で。」

ネギシ「待て待て。短い。」

ハムチー「これくらいだろ？あとがきつて。」

ネギシ「いや。もっと長い。前作はもっと長い。」

ハムチー「突然の投稿になったから、あとがきのねた考えてないんだよ。」

ネギシ「そうなんだ…。」

ハムチー「じゃ、この辺で。次回はあとがきちゃんとやりますので。」

ネギシ「ちゃんとしてなに。今回のこれはちゃんとじゃないの？」

ハムチー「ネタがないあとがきなんて、あとがきじゃねえ！！」

ネギシ「ええええー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547/>

グロッチ・ストーリー～先駆者達の戦い～

2011年5月29日02時24分発行